

# 思い出の中から

## 山地 孝 二

此前のたつみ会が三宮の江口で催された時でした。筆者はやむを得ぬ用事で一足遅く出て出席窓涯の空いた椅子に腰掛けた処偶々先客が一人居られ（後刻西村元義氏と判明しましたが）筆者の胸間の山地と云う姓を見られて高知県の者と思われたらしく（高知県には山地と云う姓が多いらしく、筆者は香川県ですが神戸在任中は神戸乗馬クラブの山地土佐太郎氏の馬場へは能く稽古に通ったものです）話し掛けて来られたので御話して居ると会々どちらからとも無く昔のジャバの事に及び西村氏は『おっつけ友人の西村徳三郎氏が来る筈だから紹介する。同氏は南洋製糖時代永らく鈴木のスラバヤの店に居った人だから』との事で数分後、同氏の到着で紹介され色々話して居る間に筆者の当時の記憶が甦がえり其時代のスモンコウ工場の買収の経緯を執筆する気持になった次第ですが、其後南洋製糖に関係を持たれた方々に過去を想起される一助ともな

らば愉快です。

筆者は東店で専ら金子柳田両翁の御指図にて遊撃的所謂ツラペリングエイゼント式な立場で被地此地と旅行を続けて居たのですが丁度千九百十八九年頃のシンガポール仏印等を旅行して居りました。当時シンガポールには安藤珍成氏が駐在して居られ其辺一体を連絡監督されて多忙を極めて居ました（筆者もしばらく御厄介に預ったが）と云うのはシンガポールと云う所は当時は所謂南西諸島や印度以西欧州航路の要衝に当り現今の航空時代とは異り印度中近東欧州への旅行者や貨物は必ず立寄って最小一二泊は過ぎねばならない港でしたから、当時の鈴木商店としては政府の高官、取引先の旅行者、店の出張員等の送迎や世話をするのが最も必要事でしたから、安藤氏の手腕無くしては印度海峡植民地南西諸島との貿易中継等の雑多な仕事は、到底所理出来なかつた訳でした。話が外れましたが筆者は仏印滞在後半

年ばかりシンガポールにてしばらく其地域の实情に親しんだ後ジャバに掛り一先居をスラバヤのオランネホテルに定め、金子氏からの次の命令を待機しつつ傍ら砂糖漆のプランテーションへの化学肥料販売等の調査などをして居りました処が、二三ヶ月たった頃同ホテルへ日本人が三人泊込んで来ました。其翌朝食堂で顔を合わせましたら最近東京に設立された南洋製糖会社の出張員で、東大出の井上、河村工学士と加納法学士の三君だと云う事が判りました（其の後加納君とは兵庫御影の筆者の旧住居の近所にて再会、当時同君は宝塚ホテル、六甲山ホテルの重役支配人をして居られたが数年前大阪の新大阪ホテルの監査役を最後に亡くなられました。河村井上両君には遂に今日迄再会の機無く残念に思つて居ります）其三君の話に依ると南洋製糖会社は旧北海道長官だった高知県人河村氏？が社長で新会社は未だ一ヶ所の工場も持って居らぬので一日も早く現地に工場を持つ必要があり、既成工場の買収に此度吾人が出張を命ぜられたとの事でした。何分にも三君ともに海外出張は最初として万事不勝手、元々社長は同県の関係にて金子氏とは懇意で新会社の株も

鈴木で多少は持つて居るらしく、殊に三君の出発時には、『先方へ到着したら鈴木の人居る筈だから現地事情を聴いて行動する様に』との指令もあつたとの事で自然筆者とはすぐ懇意になり、其内には『鈴木としても株主の一人たる以上多少の利害関係はあるのだから仕事を手伝つて呉れないか』と云う処迄来ましたが筆者としては生憎其十日程前他のホテルへ到着して招待中の旧朝鮮の或金鉱の老技師（御名前を失念）が金子氏の命にて、ニューカレドニアへニッケルマインを調査に行くのだが出発時に金子氏から山地に同行して貰えと云われて居たから同行して呉れないかと云われて居た矢先なので、南洋製糖の方は此際特に金子氏からの電命でも無い限り独断で買収運動を援助する事は出来ない旨答えて置いた為、其間に三君がひそかに内地へ懇請して居たのか数日経って金子氏から『南洋製糖の為め買収運動を援助せよ』との電命に接し愈々運動に加わる事になりました。勿論老鉱山技師には大変気の毒な事をしてしましたが数日後の便船にて同氏単独にて目的地へ出発されました。そこで筆者の打った手は先ずスモンコウ工場の持主に面会しました。

当時同工場売却の噂は広く知れて居て其買収には現地のオランダ第一商社と日本の明治精糖が行動を起して居り全く三つ巴の競走を実現していったので、住所は別として工場を入手せんとすれば一日も早く工場所有者の華僑に縁古のある筋を掌握する事が最も近路で成功の可能性あるものと考えられたので、逸早くスラバヤで永年雑貨商を営み既に成功者と目せられていた邦人高橋老が当の華僑と親交がある事を探知し別にランバグフォストと云うオランダ商社の支配人で筆者と同年配のエバンス君がかねて肥料販売調査の事で心易く交際して居たのを幸い、同君を介して持主の顧問をしているオランダ弁護士ドモリン氏に近づき猛運動を展開し傍ら会社側の三君を説いてハドソン自動車を購入し、ホテル

ガレイジに保管せしめ五十余哩の距離にあるスモンコウ工場へ三君がかわるがわる毎日出向いて工場諸設備及びプランテーション其他を充分に精査して買収価格の指値に万遺漏なきを期しました。一方地元競争者の邪魔も相当なものにて彼等は専ら官辺側を利用して華僑を圧迫して成就せんとし、明治側は土地不慣と外人との接衝に弱さを暴露折角重役がバタビヤ迄渡来しながら愚図愚図して居るのを幸い加え一時も早く工場を持ちたしとの会社側三君の熱意に燃える大奮闘と相俟つて無論幾多紆余曲折の後結局確か百四十九万九千余ギルダー？の値で南洋製糖に凱歌が揚がった様な次第です。そして愈々本国から社長が出張して来て開場式に参列と云う段取迄に漕付けたのです。処が筆者はさきのニューカレド

ニヤへの同行が手間取り老技師が単独で同島へ渡航したのでやっと手が空いたとたんに、金子氏から『メキシコのサリナクルースに鉄屑が三十余万噸あるそうだから其買収に急行せよ』との電命に接し

世界を旅行していても、意外な所で金子氏の内命で旅をして居る人々に出合ったものでした。勿論当時既にロンドン、ニューヨークの如き重要な都市には、高畑、永井両氏のコンビに依り鈴木のは確実な足場は確保されていたのですが、他地域の多くは開発の途上鈴木のは挫折に依つて余り実を結び得なかつた事は残念であります。（終り）

### 和田岬の和楽園

中央丘上の六角堂の周囲に海水を引き入れて池をめぐらし鯛、はまち、すずきなど、いかなど又いわし、海亀など数多放養す。

柳の絮 柳田義一  
手品師の隠しポケット松の芯  
鯛の尾の一擲生れんとするは人工島  
思念一つ風柔かき柳の絮  
鳳仙花弾けば巖の頂点に  
優曇華の消えざる咲い茶碗置く

